

日高港の歩みとこれから

御坊の産業と暮らしづを支える
海の玄関口

太平洋に開かれた重要港湾・日高港。

物流の拠点として、そして人が集う憩いの空間として。

地域の歩みと未来をつなぐ「海の玄関口」の姿を、

その歴史と取組からご紹介します。

木材輸送の港から 地域発展の拠点へ

本市と美浜町にまたがる日高川の河口部に、「日高港」があります。

日高港は、古くから川船と海運をつなぐ重要な拠点として発展し、木材をはじめとする紀中地域の物流を支えてきました。とくに、地域の代表的な地場産業である製材業向

けに、外材（輸入木材）の原木を運ぶ港として発展し、機帆船による二次輸送で木材を供給する「流通港湾」としての役割を担っていました。

しかし当時の日高港には、いくつかの課題もありました。

外航船などの大型船が入港できないこと、荷役作業が非効率であること、輸送コストが高いことなどです。

こうした中で、和48年ごろからは、人口や産業の都市部への一極集中を抑えていくという考え方のもと、港の整備と臨海部の土地造成を柱とした地域開発構想の検討が進められました。

あわせて、「御坊田園工業都市構想」の一環としても、早くから港の整備が強く求められ、日高港の将来像について具体的な検討が行われました。

昭和55年3月には、塩屋町南塩屋沖に外洋では日本で初めて火力発電所用地として的人工島を造成することが認可され、港の本格的な整備に向けた機運が一気に高まりました。

同じく昭和55年に、和歌山

県が「日高港開発構想」を公表。昭和56年には、国の港湾整備計画に位置付けられ、昭和58年3月には調査報告書がまとめられました。

この報告書では、長期的には大阪湾にある各港と役割分担を図りつつ、まずは紀中地域の発展のために日高港の機能を充実させることが示されました。

その後、昭和58年10月に日高港が重要港湾に指定され、和歌山下津港と並ぶ、国内外に開かれた「海の玄関口」としての役割が明確になりました。

木材輸送を担う港から、地域発展の拠点へ——日高港は、大きな転換期を迎えるこ



日高港暫定供用開始

